

## 直 音 注 (続)

高 松 政 雄

## 四

以上が、韻母の韻頭、拗介音の反映としての我が直・拗音形に関する解析である。これはこれとして、次いで、これを戻した形での韻母全体の状態を見てみる<sup>9)</sup>。とすると、茲で最も顕著なる現象は、殊に呉音直音注での、十六韻撰内に於ける異撰間の相通である。斯かるが如きが、我が字音形の特徴を判然と露呈するものたるは、言を俟つまでもない。故に、其処から逆に推して、我が方での韻撰の枠組みが構成され得る訳である。その輪郭と、その所以とに就いては、私としては曾て示せる事があるが（「日本漢字音の研究」）、それはまた、その条件如何で、多少とも可変的なものでもある。が、今はその辺の事情を反復する事なくして、唯々、この直音注に於いて認知される事象を追っていく事とする。

凡そ、漢字の音のその Japonisierung に相当たりては、彼土の密なる音区分体系をば、粗なる我が方のそれに受容せしめる関係上、原音は或程度その本来の姿を弛めて拡散するは必定である。それがために、茲に、右に言えるが如き異撰との融合が生ずるのである。斯く異撰の相通が惹起する位であるから、同撰内での移動は無論の事である。先

驗的に言っても、彼の61種もの韻の細別が、こちらで宛らに再現され得る道理の無き事は既に自明である。従つて、より大なる単位たる韻撰間の交渉の相に先ずは着目して可なりなのである。

として、その最たるものとして第一に挙ぐべきは、陽類と陰類との相通である。即ち、それは、彼の喉内鼻音「ㄣ」と、母音「ㄠ」とが、共に、我が「ウ」と置換されるところに起因して現出する。但し、これは、中古期にては寧ろ散見の程度に留まるものである。逆説的には、これは今片つ方の仮名書きとは異なつて、多分にはその境界は守られていると言えるが如きなのである。その比較的に少なき中古期のものを挙例するに(傍線部が陽類)、

蒙(明東開1)——牟(明尤開3) 新訳華嚴經音義私記

闕(端候開1)——東(端東開1) 西大寺本金光明最勝王經古点

等(端等開1) 金光明最勝王經音義

注(知遇合3)——重(澄鍾合3) 金剛波若集驗記

虫(澄東開3) 金光明最勝王經音義

錄(透侯開1)——中(知東開3) 聖語藏中觀論平安初期点、また、和名抄

籀(澄宥開3)——中(知東開3) 知恩院大唐三藏玄奘法師表啓

疊(見姥合1)——中(知東開3) 地藏十輪經元慶点

但し、これは、母字の諧声音符読みに依る誤読。

猪(知魚開3)——徵(知蒸開3) 同右

但し、これは母字を長呼せるもの。

盜(定号開1)——当(端唐開1) 新撰字鏡

構（見候開1）―向（曉漾開3） 同右

陶（定豪開1）―唐（定唐開1） 大乘掌珍論天曆点

戎（日東開3）―柔（日尤開3） 大般若經字抄

叢（從東開1）―奏（精候開1） 金光明最勝王經音義

訟（邪鍾合4）―受（禪有開3） 同右

牢（来豪開1）―良（来陽開3） 同右

勞（来豪開1）―良（来陽開3） 同右

囊（泥唐開1）―惱（泥皓開1） 同右

大略、右の如くである。因みに、同じき事は、法華經单字（また、九条本法華經音）の例の和風反切等にも認められる。例えば、其処では、

夢（明送開1）―莫諷反・莫普反

無（微麌合3）―弥夫反・亡風反

の如くに、唇音に限り、数例が指摘されるのである<sup>99</sup>。

しかるに、これが中世に下ると、最早その識別意識は殆んど影を潜めるに至ったかの如くとなる。加之、此処には、もう一つ、本来の唇内入声音たる「ㄹ」の、仮名書きに依るフヴウに於けると同じき現象が併発しもあるのである。斯かれば、この時代では、直音注でも、陽・陰・入類の三者が、「ウ」に於いて合一である仮名注と何等怪庭なく、一同に帰してしまふ次第である。その姿は、例えば、無窮会本大般若經音義に判然と出ている。その見本を一つ引く<sup>100</sup>。即ち（今は唯、その韻尾のみを記すに留める）、

ŋ 巷・仰・糠・鷗

u 耗・号・厚

| 向 ŋ

p 甲・鉀

これは、母字の三類九字を注するに、一つの陽類字を以てせるものである。斯くては、唯、主母音が我が音形で等しかるのみで、もうそれだけで容易に自由に相互に通じ得る事となる。この点では、その原音の韻尾は最早窺えしめぬものである。そして、これが当時の普通の意識であった。

茲で、問題が韻尾に関せるのに託して言うに、所謂三内音の中、その喉内鼻音と、そして、遂に中世に入れば、その唇内入声音とが右の如くに母音内に解消し果せてしまふが、それに反して、なお直音注でその別は厳守するものは残存していたのである。それは即ち、唇内鼻音と舌内鼻音との峻別である。これが、中古期にして既に現実的に混淆せるは、その仮名表記の方にて明白である。それにも拘わらずに、この直音注の側にあっては、かの中世の無窮会本大般若經音義に於いてすらも、なおその両者間の越え得ない障壁は守り続けられているのである。これを以て、その m n 韻尾に対する誠に鞏固なる意識の伝統が再確認され得る。逆には、その異国的たる事に対する認識が余程強度であったというその証しが其処に顯示されていると言えるのである<sup>10)</sup>。

ところで、右が茲での最大の出来事であるが、これに次いで、なお種々にその異撰間の合流はある。が、それは今、一々に縷説し得ぬが故に、左にはその中でよく有り勝ちなるものを主にして、粗々説くの拳に出ずる事とする。

①陰類同士に於ける相通の、その異音にての特徴たるものに、遇撰―流撰間の事がある。これは当然、その主母音の近似性に依るものに他ならぬ。例せば、左の如くである(以下、例は、便宜上、引き続き、最初の直音注資料たる新訳華嚴經音義私記より出す)。

区(溪虞合3) — 久(見有開3) iu — ieu

修(心尤開4) — 須(心虞合4) ieu — iu

図(定模合1) — 豆(定候開1) ou — ne

儵(透侯開1) — 注(知遇合3) ne — ni

特に、この中の尤韻は、短呼形である事が明らかである。

②蟹撰—仮撰。この前者は二重母音 Diphthong の韻撰である。しかるに、我が方では本来、それに馴染まぬが故に、連母音 Hiatus として成立せしめる以前には、それを単母音化 Monophthongierung、若しは、時にそれを割って、その間に半母音(半子音)を介入せしめざるを得なかったものである。されば、就中に、この前者では、仮撰と接近する事となる。それに仮撰は、その上古音にて魚部所屬のものは、古く、我が方で e 段音形を採った(喉・牙・唇音)。茲にこの両者は極めて相通じ易き所以があるのである。この際、その Japonisierung には、母音の長・短呼はまた自由でもあった。その例、

翳(影霽開4) — 亜(影禡開2)

誨(曉隊合1) — 化(曉禡合2)

なお、当該書(新訳華嚴經音義私記)には、また、同様の事として、

陞(並齊開4) — 辺亜反

の如きも見える。序でに、この母字は、万葉仮名漢字で、「へ乙」たるものである<sup>90)</sup>。

③山撰—臻撰、咸撰—深撰。この二者、彼土的には、唯、その韻尾を異にするのみのものである(上の相通が舌内音 n、下が唇内音 m)。従って、便宜、茲に一括する。これらの韻撰内の韻は、上古音からの系譜上、やはりその主母音の相似性に依って通じ合う事がある。例えば、

建(見願開3) — 斤(見欣開3) (コン)  
 琴(群侵開3) — 敵(疑敵開3) (ム)

である。その上古音は、それぞれに、

寒部 *uei* — 文部 *uei*

侵部 *iei* — 談部 *iam*

となる。この推移を仮名で観念的に描けば(清・濁は一旦外す)、それは、寒・談部から元・敵韻の方は、カン(ム) — コン(ム) — ケン(ム)、文・侵部から欣・侵韻の方は、コン(ム) — キン(ム)の如くである。斯かる途上でのそのコン(ム)にての合流の具現化が、我が呉音形という訳である。

④宕摂—梗摂。この両者は隣同士の韻攝である。その事で以て既にその近さは了解されるけれども、なおその上古音よりの動きに徴して、それを確認するに、中古音の宕摂は、元、陽部に発し、同じく梗摂は、その陽部と耕部とに由来している。そして、この陽部のダブる所に、実は、中古庚韻の出生地が求め得るのである。因って、いわばこの庚韻が、その前後の韻の接合点たる訳である。これらの主母音は、前者宕摂では変ぜぬが、後者梗摂にては若干移動して、その中古音に収まる。その展開の相は左の如くである。即ち、

陽部 *ai, iai* — 唐陽韻 *ai, iai*

耕部 *ei, iei* — 庚韻 *ai, iai* 耕韻 *ae, iae* 清韻 *iei* 青韻 *iei*  
 この音形間で呉音の相通は生起する。例、

奮(從陽開4) — 成(禪清開3) (シャウ)  
 迎(疑庚開3) — 向(曉漾開3) (カウ)  
 敵(定錫開4) — 着(知葉開3) (チャク)

この最後者の入類も、韻尾こそ異なれ、その主母音の動態が、陽類に同ずるのは無論の事である。

⑤通摂―曾摂。通摂の韻尾は *ɲu, u, ɔ*、これに対して、曾摂のそれは *æ* である。両者、甚だ相近きは、これにて一目瞭然である。しかも、その上古音では、前者の一部が後者と共通していた。即ち、前者の中の特に東韻には、後者のその蒸韻所屬字が含まれていたのである。これらの事情の相乗作用が、本項の相通を成立せしめる。万葉仮名にあっては、この前者がオ甲、後者がオ乙用の漢字たりしが、その甲・乙の別の崩壊後の中古期にては、当然、其処での曾ての差も消失する。因りて、茲より推しても、右の可能性は十分に首肯され得る事となる。その例、

膺（影蒸開3）―雄（于東開3）（オウ）

右は、母字・注字共に、上古音で、蒸部のものである。

## 五

さて、異摂間に亘る相通の概況は、以上の如くである。斯くの如きはなお外にも存するけれども、また、個別論的には種々の場合が付加されるけれども、目下は、いわばその標本を提示するに留めて、これ以上はその細説には及ばずにおく。

斯くて、右にて明白なるは、その主母音の類似性に依るこの現象である。これは言を俟たぬところである。殊に、吳音の方は、古い系譜を担うが故に、彼の上古音よりの展開を検せば、事は愈々釈然とする。しかも、その受け入れる我が方の母音組織は、極めて単純なる五つの単純母音に過ぎぬ。それを以てして、斯くは漢字の音を Japonisme-rung せしのである。そして、その有り様は、畢竟、曾て示せる体系の枠内での移動というところに落着するのであると思量される。

ところで、最後は声調論である。しかしながら、実は、茲にては殆んど何も云為し得る事はないのである。何者、直音注では、その音形の同じきを注するのみであつて、その声調には意を用いぬのが一般であるからである。成程、声点付きの資料は、別に多々存するけれども、この直音注にあつては、それに拘泥する事がない。或いは、それに係わるだけの違がないと言ふべきである。それは、この法が、簡便に直ちにその注音をする性質のものたるからである。その際に一々にその声調をまでも顧慮しては、蓋しこの法は成立不可能となるであらう。注字には極めて通常なるものを持つて来ねばならぬ。そこに制約されるならば、土台、声調を一致せしめる事等は至難の業に属する。加之、我が方では、頗る特殊の領域以外では、その声調は無視するのが慣わしである。その証拠に、その仮名書きの場合に於いても、特に声調は視野の中に留められる事がない。その伝統は、爾後全く不変にて、現在に至っている位である。穿鑿するに、前節に述べたる異韻撰間の相通も亦、只管に同音を示すのを目的とするというこの注音法の本性に出ずるところなのであらう。されば、唯々、その音形の同定のみにいわば汲々とする直音法で、この声調は緊要ならざるもの *Irrelevanz* でしかなかったのである。斯くその原理に就けば、此処には元々期待さるべきものが皆無であるは、事の必然の姿である。

○

直音注の内幕に関しては以上の如くである。本稿では便宜上、それを、声母論、韻母論、声調論に分割して記述して来た。総括的には、この法は、漢字の音を、彼土の側からならぬ我が国語音を基盤として表示するものである。但し、その声調はこれを無関係の儘に放置する。この国語音の根底にあるものは、仮名的意識に他ならぬ。されど、それはその文字に依る表記法の未だ定まらざる前では、当然、混沌たる事鶏子の如くにして、冥滓にして牙(芽 きざし)を含めるに相似たる事があつた。その如きを漸次分析的に明確にして後に始めて、その仮名文字のみにての正書法が確立されるのである。その経緯中には、相応の揺動を経験しつつ、である。斯かるが故に、この直音法にはなお



総合的な面が残されている。就中に、拗介音等はその最たるものとして指摘し得るものである。そして、この本質は、少なくとも中古期を通じては不変的で、守旧の域を出る事はない―其処に則って、本稿では、その例証に最古と目される資料（新訳華嚴經音義私記）から主に引用するのである―。それが、中世に入るや、その事情に或面では変化を見せはする。されど、これがこれであり得る限りでは、その柵（しがらみ）は打破し得ぬ。これは当前である。その事が時代の趨勢、また、要請に答え得ぬものとして、これをしてやがては衰微するの運命下に入る事を余儀無くせるのである。同時に、正に名詮自性の *das Siniojapanische* は、和製の仮名でなくしてはやはり恰好なるものとしては認め得ぬ。しかも、その仮名たるや、最早その時その時に応じて、我が国語音を十分に表現し得るものとなり至っている。さてしては、直音法は無用である。従って、その役割はそれまでのものとして、つまり、仮名正書法確立までのものとして限定はされる。さは雖も、その間に於いては、日本漢字音史上にての、重要な存在たりし事は、これを否定すべくもあらぬのである。

直音注とは、その如きものである。其処に、この意義と価値とが存する。

#### 註

- (9) 以下の記述に関する点で、先に左の事を注して置く。即ち、中国音韻学では、「韻母」と「韻」間を区別する。即ち、一音節中で声母を分離せる残り全てが韻母、そこから介音を外せるのが韻である（拙著「日本漢字音概論」参照）。
- (10) なお外に、新撰字鏡にそれらしきものを2例認めるが、これは、それをその儘に受け取るには、或不安があるというものである。詳しくは、拙稿、新撰字鏡の反切―巻第一の検討より―（訓点語と訓点資料57）。
- (11) 詳細は、註(5)に所引の拙稿、参照。
- (12) 斯くは雖も、直音注にこの混淆が絶無であるのではない。稀にはその誤りが出る事はある。例、西大寺本金光明最勝王經古点より、

尋（邪侵開4）m―神（神真開3）n

直音注(統)

- (13) 闇(影勘開1) m—安(影寒開1) n  
「亜」字に就きては、左記も参看。

- (14) 橋本進吉—古代国語の「え」の仮名について(同著「文字及び仮名遣の研究」所収)  
念のため、茲にその枠組みのみを揭示しておく。

B	A	V / F	
遇	果・仮	∅	①
止	蟹	i	②
流	效	u	③
臻・深	山・咸	t n p m	④
通・曾	江・梗 宕	k ng k' ng'	⑤

△註▽

F…韻尾

V…主母音  
B…  
A…  
a  
e  
など

※ 本稿は、「直音注—漢字音史(二)—」(人文論究40・3)の続稿である。これらは本来は一つであるものの、紙数の都合上、二回に分載せるに過ぎぬものである。